京都府 正壽院 快慶作木造不動明王坐像 模刻研究について

文化財保存学専攻　保存修復（彫刻）　三好 桃加

はじめに

京都府正壽院が所蔵する木造不動明王坐像は、鎌倉時代の仏師快慶による制作とされている像である。快慶作とされる不動明王坐像は計３軀が現存しており、どの像もよく像容が似ているが、私は特に本像の魅力に惹かれ模刻制作を行うこととした。似ている３軀の像の中でなぜ私が本像に強く惹かれたのか、他の２軀の不動明王坐像との比較を行うとともに、当初と同じ素材・構造技法・彫刻表現を実制作で習得することを試みる。

本像について

本像は、大師様不動と呼ばれる形で、両眼を見開き、上歯で下唇を噛む憤怒相を呈し、左手に羂索、右手に剣をとって結跏趺坐する姿にあらわされる。

像高 45,1 ㎝の小像であり、構造は、ヒノキ材を用いた一木造で、玉眼が嵌入されている。頭体幹部を一材から木取りし、両耳を通る線で前後に割り放し、内刳りを行い、さらに三道下で頭部と体部を割り放している。体幹部背面は背板風に一材、両三角材、両脚部に横一材をそれぞれ矧付ける（図 1、図 2）。

台座框裏面に墨書銘（図 3）があり、台座と光背が焼失したため、寛政 3 年（1462）に仏師好尊による修理が行われたことが記されている。また同銘記に本像が仏師快慶の作とする記載も確認される。なお、本像の制作年代の詳細は不明である。

その他の快慶作不動明王坐像との比較

正壽院・醍醐寺・メトロポリタン美術館それぞれが所蔵する計３軀の不動明王坐像は快慶作とされ、それらの像は同じ作者と言われるだけあり３軀ともとても似通った造形をしている。しかし、３軀の像を詳しく比較したことでまずはじめに感じたことは、本像が他の２軀に比べ少し可愛らしさを感じさせるという点である。そのように感じる原因は何かと考えたところ、さまざまな要因が浮かび上がってきた。

まず、本像は面長な他の２軀に比べ、目の位置が低く丸顔であるということである。さらに、丸い輪郭のうえに目・鼻・口が他の像と違い中心に寄っているため、そこから幼さを感じさせていると考えられる。総髪についても他の２軀と比べると、本像からは優しげな雰囲気を受ける。なぜなら、本像は総髪が均等に表現されているが、他の２軀は、右側頭部の形を強く表現し左側頭部に向かうに従って髪にボリュームを持たせることで、左頬横で結ぶ辮髪から髪を結ぶ際の力を感じさせるからである。

本像が他の２軀と比べ可愛らしく感じる要因は頭部だけでなく、体部の像容にも要因がある。本像は、脇の開きがあまり大きくなく、力んでいない自然な姿勢をとっているように見えるが、対して、他の２軀は脇の開きが大きく、その動きに連動して両肩が少し上に上がり力が入った像容となり、本像と比べると憤怒している様子を強く感じることができるのである。なお、宝剣を持つ右手の位置も本像は

右脚近くまで下ろしているが、他の２軀は位置が少し高いところに右手があり、宝剣を力強く握り締めているように見える。

また、他の２軀は両脚部の衣文の造形が似ており、右脚が裳を巻き込む形で結跏趺坐をしている。そのため、衣文が右脚に強く引っ張られながら両脚部の中心に迫り、両脚部の境目の陰影が濃くシャープさを感じる彫刻表現であるが、本像は両脚部が裳を巻き込まずに結跏趺坐をしているため、緩やかな半円を描いた柔らかな印象を感じさせる衣文の表現をしている。

３軀を比較し、なぜ本像に可愛らしさを感じるかを考えた結果、他の２軀と異なる特徴が本像に多いことがわかった。このことから、私が本像に惹かれた理由は本像が他の像と違った特徴を多く持った像だからではないかと考えられる。大日如来の使者、または大日如来の怒りの化身ともされ、迷いの中にいる人々を叱咤しながら悟りに導くという役割を担う不動明王は、憤怒相をし鑑賞者に対し恐れを感じさせるものとして造形をされるが、対象者を畏怖させる造形の中にほんのわずかに柔らかい印象を同時に併せ持つ、独特な雰囲気を持つ本像に私は魅了されたのであろう。

宝剣の復元制作について

仏像の持物は、別材で作られることが多いことから当時の持物が現在まで残っていることが珍しく、本像の持物である宝剣・羂索も後補とされている。持物を制作するにあたり、宝剣の形に違和感を覚え丁寧に鑑賞したところ、右手の枘穴が円形であるのに対し、宝剣の柄は板状の四角形であることがわかった。このことから、後補の宝剣（図４）が本来はさらに立体感のある造形をしている可能性を考え、宝剣の想定復元制作を試みた。

鎌倉時代の不動明王像で当初の宝剣を持つ像を探したが、ほとんどが後補であったため、後補ではあるが本像以外の快慶作の不動明王像や、曼荼羅などに描かれた線描の不動明王像が持つ宝剣を参考資料として形を想定復元した（図５）。

おわりに

本研究では実際に模刻制作を行うことで、鎌倉時代の本格的な技法を学ぶことができ、さらに快慶作品の肉体感や衣文の表現を感じながら制作することができた。特に本像の顔をほんの少し右に向ける動きを表すことが難しく、よく観察することで顔のわずかな動きに合わせて、頭部から顎の肉、首や胸の動きまで全てが繋がって人体として丁寧に表現されていることがわかった。さらに柔らかな布がどの角度から見ても澱みがないよう肉体に纏っており、当時の制作者の造形技術の高さにとても驚くとともに、人体と衣文の動きをバランス良く見事に表現する彫刻センスに感心させられた。

謝辞

本研究に際し、模刻研究をご快諾くださいました京都府正壽院様をはじめ、関係者各位、ご指導ご協力頂いた皆様に深くお礼申し上げます。

図 1 構造図（正面）

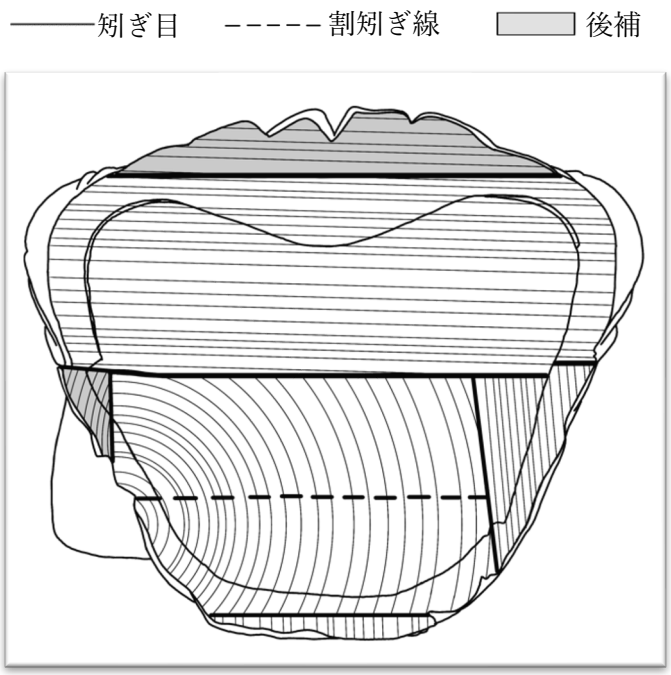
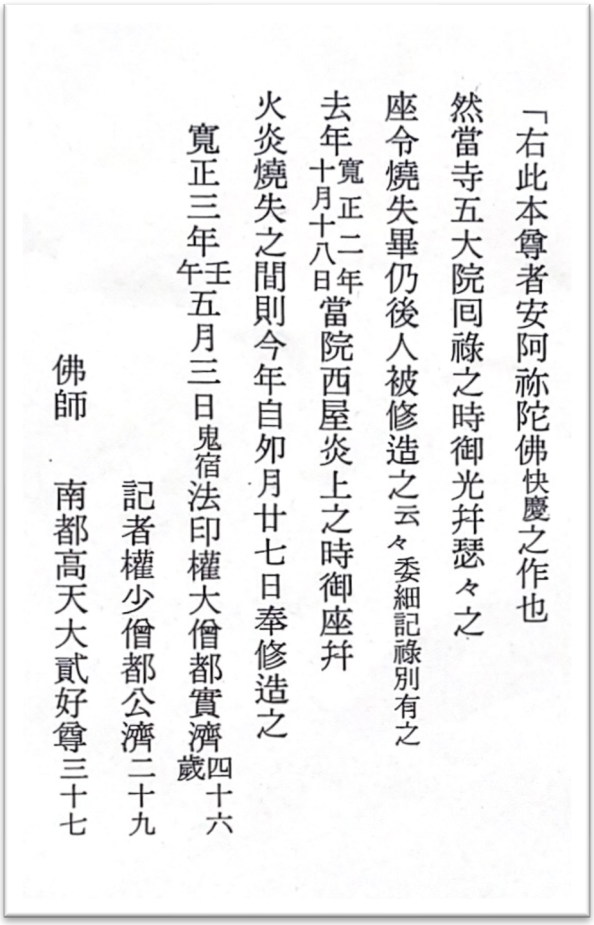


図 2 構造図（像底）



「右此本尊者安阿祢陀佛快慶之作也
然當寺五大院同祿之時御光幷瑟々之
座令燒失畢仍後人被修造之云々委細記祿別有之
去年寛正二年十月十八日當院西屋炎上之時御座幷
火炎燒失之間則今年自卯月廿七日奉修造之
寛正三年壬午五月三日鬼宿法印權大僧都實濟四十六歳
記者權少僧都公濟二十九
佛師　南都高天大貳好尊三十七

図 3 墨書銘

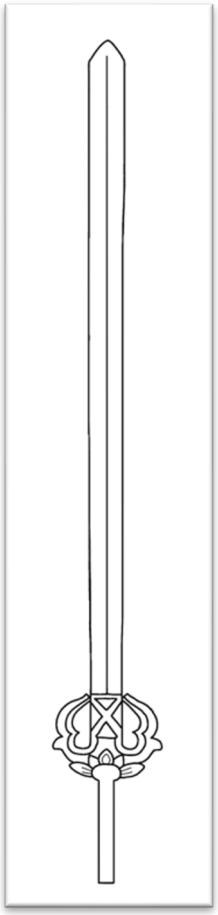


図 4 宝剣（後補）

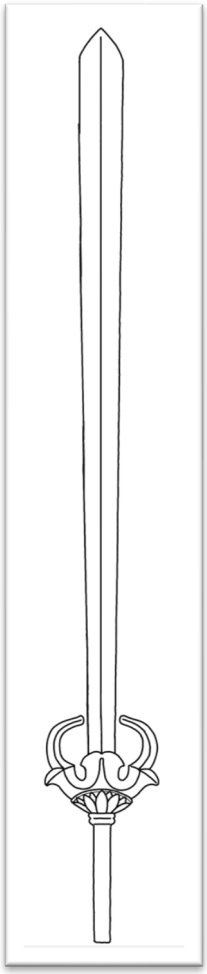


図 5 宝剣（復元）